Magic of burglar

裏切り者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｇｉｃ　ｏｆ　ｂｕｒｇｌａｒ

【Ｎコード】
Ｎ３６９１Ｄ

【作者名】
裏切り者

【あらすじ】
人間と精霊とが共生する国『アウストアルト』で運命の歯車はまわりだす。

Prologue

海に太陽が沈み、港町に夜が降りてくる。通りを行く人は入れ代わり、町は静寂を帯びる。子守唄の波音が人々を寝静ませ、町は表情を変える。

暗黒のカーテンが降りきった時、彼はそこ――――教会の上に立っていた。

「ふむ。今宵は月が綺麗だな。」

今日は満月、月の光が彼の姿を浮かび上がらせる。身長は１８０センチ位だろうか。全身を黒で統一し、銀髪が風に靡いている。年齢はわからない。

彼は呟く。

「闇よ、我が懐に集え。ラジアル。」

彼の姿を闇が覆い隠し、見えなくなる。

運命の歯車はまわりだす。ゆっくりと。確実に。その先は――――

運命に導かれ・1

ここアウストアルトでは、人間と精霊は共存しており、人間の王と精霊の長の契約により、人は精霊の力を借りて火を起こしたり、水を出すことが出来る。
精霊は大きく２つ――『天』と『地』に分類される。さらに『天』の中で『雷』『時』『風』、『地』の中で『火』『水』『土』と分類され、人はみなこの６つのうちいずれかの精霊をもって生まれる。また精霊には３段階の階級があり、『初級』＜『中級』＜『上級』となる。上級精霊は１％もいないとのことである。
さらに精霊とは別に『聖霊』と呼ばれる特殊な性質をもつ人々がいる。（数年に１人の確率で生まれる。）現在確認されてる聖霊の種類は２つ――『聖』と『闇』である。
聖霊と精霊の力の組み合わせることにより、上級精霊の力を上回る力が使うことが可能になるようだ。
ただ、王族はまた違う力を持つようであるが、どのような力かは知られていない。

――――『精霊の神秘と可能性』１４３ページ――――

アウストアルトは５０００年前にリフェペ１世によって建国された大国である。暁大陸の南半分を国土とし、海沿いの港町では毎日新鮮な魚介類が水揚げされている。なかでも一番大きな港が『サウントパルト』である。

――――『国』１２ページ――――

「……まね…あまね……雨音！！」
「ん？なぁに？ルシッド」
私――藍野（あいの）　雨音（あまね）は今、同じ研究グループであるルシッドとサウントパルト図書館に来ていた。提出レポートが遅れて追加課題を出されてしまったのである。
「暑いから涼しい風起こしてくれない？　レポート手伝うからさ。」
「自分のレポートを終わらしてからいいな。」
「ちぇっ」
私の精霊は『風』の『上級』で、ルシッドは『雷』の『中級』である。二人とも王都『インフェルノ』にある精霊魔法学校の2年生である。

運命に導かれ・1（後書き）

ＦＴって書きにくいです＞＜

運命に導かれ・2

私達はレポートを作成するために王都から約２０ｋｍのところにあるサウントパルト図書館にわざわざ遠征に来ているの。もっとも私の分担分は終わったんだけどね。
「はぁ……なんでルシッドはそんなに効率が悪いのかな？」
「俺が悪いんじゃない。ここの本が分厚いせいと、多すぎてどこがどこにあるかわからないからだ！！」
「あら、すぐに私は終わったわよ？」
「お前は風の精霊に手伝ってもらってるからだ。周りを見てみろ。みんな苦しんでんだぞ。」
「仕方ないじゃない。大陸一の蔵書量をほこるアウストアルト王国第一王立図書館なのよ？」
「でもよう。どうして王都じゃなくてこんな所に建てたんだろうな。」
「さぁ？港町のほうがいろいろ便利なんじゃない？人の出入り激しいし。」
「でもアレはおっどろきだよな。」
ルシッドが言っているのは、３日前にあった盗難事件で、それがただの盗難事件なら別に騒ぐことじゃないんだけど、王国第ニの都市で最も厳重な金庫から『レアメタル』の一つ『オリエンタルメタル』が盗まれたのが問題なのよね。
『レアメタル』っていうのは、天然の宝石に精霊の力を封じたもので、すっごい貴重なの。世界に１０個もないんだよね。で、『オリエンタルメタル』っていうねは名前の通り、朱色の宝石で、『火』の精霊の加護を受けてると言われてて、ものすごい力を持ってるの。
「盗んだ奴の手掛かりはなし……か。精霊守護警備隊もだらし無いなぁ。」
精霊守護警備隊……ようは警察みたいなもの。サウントパルトの駐

屯隊は今頃たぶん、町中を捜しているかな。

「ゴホン。君達、ここが図書館内なことを忘れてはいないかね。静かにしてもらおうかな？」

「あっ館長さん。すみません。ルシッドにはよぉく言い聞かせておきますから。」

「うむ。わかればよろしい。」

「あっ館長さん。」

「なんじゃね。」

「レポート手伝ってくれませんか。」

「はっはっは。遠慮しておこうか。君の健闘を祈ろうわい。」

「……っこの、黙ってレポートしなさい！！」

運命に導かれ・3

すでに夕暮れ時、沈みゆく太陽の残光が町を紅く染める。市場では店をたたみ始める店がちらほらと見え、酒場には明かりが燈り始める。

そんな中、図書館から大広場へと通じる道をゆっくりと軽く1組の男女がいた。

「あーあ、今日も結局レポート終わらなかったね、ルシッド。」

「悪かったよ。いいところまでは来てるんだよ。」

「はぁ……昨日も同じこと言ってなかった？」

「そうだっけ？そんなことより早く宿に戻って飯食おうぜ。俺もう腹ぺこだよ～」

「食べることに関しては人一倍なんだから……」

宿に戻ると、食堂には体格の男が数人で酒を飲んでて、うるさかったんだけど……女将さんオススメのシチューは美味しかった。でもやっぱりそいつらが絡んできちゃって……

「お嬢さん、こっちに来て俺達と飲まねぇか？」

「はっはっは、ここでは変なことはしないからよお。」

「酒は俺らが奢るからさ。」

風で彼らをぶっ飛ばすことは女将さんに悪いかなって思ったから我慢してたら……

「ちょ、てめぇ、無視すんなよ。」

「下手に出たらいい気になりやがって。」

「俺らに逆らうとはいい度胸だな。」
彼らは傭兵崩れなのか、一人が背中にさしていた大剣を抜くと、近付いてきた。酒臭いし、こいつもしかして風呂入ってない？
「ほら、剣で刺されると血が出て痛いんだぜ～　綺麗な顔に傷がつくのは嫌だろ。俺らと飲むだけだからさ、な？」
「なぁ、雨音。飯の邪魔だから、こいつらやっちゃっていい？」
「いいわよ。私もそろそろ我慢できなくなってきたから。でも宿壊さないでよ？」
「分かってるって。じゃあ援護よろしく。」
ルシッドは彼の愛用しているバスターソードを抜き、男たちに向かって言った。
「お前ら、怪我したくなかったらこの宿から出ていけ。」
「はっ、もしかしてお前みたいなもやしが俺らとやろうってのか？」
「面白れぇ。」
「俺は見学させてもらうよ、はっはっは。」
ルシッドはバスターソードを手に持ち、既に大剣を抜いていた男に向かって突進していった。私は援護みたい。
「風の精霊よ、いまこそ力を解放し、矢のように走れ、疾れ。フィアルタンス！！」
風の精霊が粒子となってルシッドの脚に纏わり付き、ルシッドは風のように走る。男は目を見開き、慌てて剣を構えるが、もう遅い。ルシッドに柄で後頭部を叩かれ、失神する。
「げっ、あの女強化呪文が使えるのか。おい、二人で同時にかかるぞ。」
「そんな暇はやらん。ライトシャイニング！！」

ルシッドの左手から放たれた電撃が残りの2人を襲った。2人はそのまま白目を剥いて、気絶した。

「ふぅ。あっけなかったな。」

「それにしてもルシッドは本当に精霊に愛されてるよね。私も呪文省略したいな……」

ルシッドは精霊に深く愛され、呪文省略が出来るのだ。この能力をもつ人は結構いて、もっと深く愛されていると精霊が見えるらしい。

「とりあえず今日はもう寝ましょうよ。」

「俺はもうちょっと食べるよ。」

「レポート明日は仕上げなさいよ。」

「分かってるって。」

「「おやすみ。」」

運命に導かれ・3（後書き）

実はいまだ主人公出てきてません……

運命に導かれ、出会う

私――雨音は何故か眠れなかった。
隣の部屋からは大きなルシッドいびきが聞こえる。眠れないときは散歩すると寝れるというのをどこかで聞いたことがあるので、私は町の中心にあるサウントパルト広場まで歩くことにした。今日は満月でもないのに、月の光が強い。その光が広場の噴水をキラキラと輝かせ、また、噴水は月光を乱反射させ、幻想的な世界を作り上げていた。
「綺麗……　散歩にきたのは正解だったわ。」
私は広場の隅にある腰掛けに座り、ただぼんやりと水の流れる様子を見ていた。
暫くたって水の音に足音が混じってくる。
私は音のするほうに目を向けると、背の高い男がゆっくりと歩いてくる。
月の光のおかげで、はっきりと容貌がわかる。
黒を基調とした服装に、肩まである長い銀髪は月の光をうけて透き通っているように見える。鼻は高く、形のいい口ひげが凛々しい。こっちの視線に気付いたのか、こっちを向いた。目つきは鋭く、鷹のように光り、黒い眼差しが私を射抜く。こちらに近付いてくる。
私は一応すぐに呪文の詠唱に入れるように、身構えた。
「こんばんは、お嬢さん。良い夜ですね。私もそこに座らせてもらってもいいですか？」
優しい声だ。私は肩の力を抜いた。
「あっはい。どうぞ。散歩ですか？」
「はい。眠れなくて。」
「奇遇ですね。私もそうなんです。」
「そうでしたか。見たところまだお若いようですが、学生さんですかな？」

「はい、王都の精霊魔法学校に通ってます。」
「驚いたな。それでは貴女はエリートなんですね。」
「いえいえ、全然ですよ。」
「そういえばまだ名前教えてないですよね。私の名前はラウ。これも何かの縁、教えてくれませんか？」
「ラウさんね。私は雨音、よろしく。」
「ラウでいいですよ。よろしくお願いします。」
「ラウは何のお仕事してるんですか？」
「私は旅人です。」
「へぇ～、トレジャーハンター？」
「いえ、この世の真実を求めています。自分の理想のために。何故精霊は存在しているのか、何故精霊は人間に力を貸すのか……ちょっとおしゃべりが過ぎたようです。夜も更けてきたことですし、私はこれで帰ります。」
「えっ？あっはい、おやすみなさい。」

私は急展開にあまりついていけなかったが、それでもなんとか挨拶した。私は何故だか、またラウに会える気がした。早く宿に帰って寝よっと……

幕開けは　終幕で
終幕は　幕開けで
止まらない　運命は
終わり　そして始まる

運命に導かれ・出会う2

翌朝、私はベッドから起きると太陽はすでに朝日とは言えないくらいの高さになっとおり、私は慌てて着替えて図書館に向かおうとした。ルシッドが先に行ってて勉強してるはず。
市場ではちょうど朝市が終わり、みんな思い思いに軽くなった財布に、重くなった買い物袋を手に持ち、それぞれの帰路についていた。
私はそれを横目で見ながらサウントパルト広場への大通りを急ぐ。
広場につけば図書館はもうすぐ。
私が図書館の門を開け、中に入るとそこには高いところの本（しかも分厚い）を取ろうといていたルシッドがいた。
私が見ていると、ルシッドは視線を感じたのだろう、振り向き、私のほうを向いた。その瞬間
ドンッ！！！ドサドサドサドサ……
「痛っーー！！痛い痛い痛い！！」
ルシッドは梯子を使っており、私のほうを向いた時、かろうじてバランスを保っていた梯子はルシッドを振り落とし、ルシッドは加速度9．8メートル毎秒毎秒の速さで落ち、その振動で本棚の本は飛び出し、ルシッドの頭に降り注いだのだ。
「貴方は馬鹿ですか？」
「う…うるさい！！」
ルシッドは顔を真っ赤にして怒って言ったが、全く迫力がない。体が本の山に埋まり、抜け出せないのだ。
「はぁ……アイオロス、その息吹をもって吹き上げよ！！」
分厚い本は宙に浮かび、ルシッドは自由になり、安全なところまで逃げ、私はそれを確認した後に本を落とした。
「助かったぜ～　ありがとう～」
「どういたしまして。とりあえず、これ、片付けよっか。あっ、ていうかごめんね。今日起きるの遅れて。」

「あっ、全然いいよいいよ。おかげでたらふく食べれたから。」
私たちが本の山を半分くらいにしたとき、外で大きな音がした。
「……今の爆発音だよな。」
「私もそう思う。行ってみよう。」
私たちは図書館を後にした。

偶然とは必然の歯車を加速させるものかもしれない。

再開

広場から黒い煙が上がっているのを見た私たちは広場から図書館の道を逆走する。広場まで1分程だが、その僅かな間でさらに爆発音が連続して2発……　そして私たちが近付くにつれて、人々の惑い、混乱、絶望のを乗せた空気が濃くなっていく。
私たちが広場についたとき、そこには予想通りの光景が広がっていた。噴水は壊れて、辺り一面水びたしになっており、水面から僅かに顔を覗かすのは、瓦礫の山である。
「なんだよ、これ」
「ひどい……」
「誰がこんなことを！！？？」
「とりあえず、生きてる人を助けるわよ。」
「だな。」

私達は瓦礫に埋まって出てこれない人などを捜して、救助しようと思ったが、不思議と誰もいなかった。ただ、兵士が駆け回っているだけだった。

「おかしいね。」
「兵士以外に誰もいねぇもんな。」

「「いたぞ！！」」
「情報通りだ。黒いマントに」
「黒い帽子」
「逃がすな！！」

「犯人が見つかったみたいだな。」
「私達も行きましょう。」
私達は、兵士の跡を走ってついていった。そこには……
「ラウ！！」
「ん？誰だ？」
「へっ？　雨音の知り合い？」
「昨日の女か。」
「昨日ってお前、雨音に変な事してないだろうな！！！」
「煩い奴だ。少し黙っていろ。」
「へっお前こそ黒いマントなんか変な格好しやがって、お前が黙」
「眠れ、ウルタムベータ」
ラウはルシッドに手を向けて、言葉を発した。それだけで、ルシッドは目を閉じ、地面に崩れた。私は慌ててかけよると、
「ルシッド！！大丈夫！？」
「眠ってもらっているだけだ。命に別状はないから心配するな。」
「ラウ、貴方はなんなの？」
「ふむ、その質問に答えるには見物人が多過ぎる。ウルタムベータ。」
周りの兵士が次々倒れてゆく。
「これでよい。さて、先程の質問だが、知りたいか？」
「知りたい。」
「いいだろう。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3691d/

Magic of burglar

2011年1月13日14時44分発行